

のぞいてみよう！ せんだいの歴史

暮らし編

俳諧―仙台藩ゆかりの俳人たち―

仙台市博物館 学芸普及室 寺澤 慎吾

第4回

連歌から派生し、滑稽な言い回しや日常的な言葉などが用いられた俳諧は、一七世紀半ばになると次第に独自の文芸として認められるようになりました。名所・旧跡が数多くある仙台藩領内でも俳人が句を残し、やがては庶民の娯楽の一つになりました。今回は、仙台を訪れた俳人や仙台藩出身の俳人たちを通して仙台の俳諧文化を紹介します。

仙台俳壇の先駆者・大淀三千風

仙台と俳諧、と聞いて真っ先に思い浮かぶのは松尾芭蕉(一六四四〜九四)だと思いますが、実は、芭蕉が来仙する以前、仙台を訪れ一家をなした俳人がいました。それが伊勢国(三重県)出身の大淀三千風



写真1 大淀三千風肖像「花に来よと 笠たかるる 一葉かな」(『俳人百家撰』部分) 仙台市博物館蔵

さて、三千風が仙台を去った後の元禄二年(一六八九)五月、松尾芭蕉が「奥の細道」を記すことになった旅で仙台を訪れます。仙台城下で画工加右衛門の案内を受け、東照宮や榴ヶ岡・薬師堂などを訪ねています。加右衛門が紺の染緒の草鞋を饒別にくれたことで詠んだ「あやめ草 足に結ばん 草鞋の緒」は著名な句の一つです。「奥の細道」は以降の俳人たちの範となり、多くの人々をみちのくへと誘いました。江戸時代中期には、芭蕉の作風(蕉風)を慕った雲裡坊や大島蓼太が仙台に滞在し、また、仙台出身者では国分町の版木屋であった丈芝坊白居が蕉風俳諧を広めました。芭蕉五十回忌追善の句碑が榴ヶ岡天満宮に建てられ、芭蕉の命日には「時雨忌」(芭蕉忌)が営まれています。

松尾芭蕉「奥の細道」

(一六三九〜一七〇七)です。三千風が仙台を拠点としたのは寛文九年(一六六九)から十数年間とされますが、松島の雄島や仙台城下に庵を営み、多くの門人を指導しました。また、『松島眺望集』(天和二年(一六八二)刊、三千風撰)で松島を全国で紹介し、「亀岡八幡宮遠眺二十八景」では、塩竈・広瀬川・金華山など仙台藩領内の名所・旧跡を選定し、門人たちとともにそれぞれの地についての句を詠んでいます。

江戸後期に活躍した松窓乙二

文化・文政期(一八〇四〜三〇)前後には、全国的に俳諧がとて盛んになり、仙台では大崎八幡宮の神官であった大場雄淵、仙台藩士で飄逸な俳画で知られる遠藤日人、白石出身の修験僧・松窓乙二(岩間乙二)らが出ました。

なかでも、乙二(一七五五〜一八二三)は奥羽俳諧四天王の一人にも挙げられますが、父・麦羅からの手ほどきを受けた以外には、決まった師につかず独学で俳諧を学んだといえます。越後や関東地方を旅したほか、函館や松前に渡って「斧柄」という庵を営むなどし、多くの同輩・門弟と交流して全国的にも名が知られました。白石城主十代片倉景貞(俳号・鬼孫)も乙二を俳諧の師としたといえます。

その後、幕末から明治時代にかけては、仙台で俳書などの刊行がますます増え、武士や町人、女性にも俳諧が広がっていきました。幕末の東北・関東甲信越地方などの俳人名録である『俳諧海内人名録』(嘉永六年(一八五三))には、仙台藩領の俳人だけで実に二八二人が数えられ、その盛況ぶりがうかがわれます。

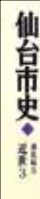


写真2 乙二筆「しんるんや 山鳩取が来る」といふ 仙台市博物館蔵

仙台市史 全32巻

原始から現代(平成元年)までの仙台の歴史をわかりやすく紹介!

「通史編」のほか、古代から現代までの歴史資料で構成される「資料編」、特定のテーマを詳しく掘り下げた「特別編」、「年表・索引」があります。



販売中!ピックアップ紹介

通史編5 近世3

B5判/オールカラー/631ページ 3,143円(税込)
江戸時代後期の藩政と、幕末の仙台の様相を紹介しています。当時の風俗や文化についても詳しく取り上げており、上記の記事で紹介した三千風・芭蕉・乙二など仙台ゆかりの俳人についても知ることができます。



既刊紹介や購入方法は博物館ホームページでご案内しています(上記のQRコードからアクセスできます)

仙台市博物館 SENDAI CITY MUSEUM

▶博物館ホームページ @sendai_shihaku

仙台市博物館

検索

▶お問い合わせ

〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) TEL:022-225-3074 8:30-17:15 ※土・日・祝休日を除く

※当館は現在、大規模改修工事のため休館しています。令和6年4月に再開予定です。